

第1回八大学工学部長会議議事録

日時 平成27年4月24日(金) 10:40～13:05

場所 KKRホテル東京 朱鷺の間(11階)

出席者 (北大)名和豊春工学部長、(東北大)滝澤博胤工学部長、(東大)光石衛工学部長、(東工大)岸本喜久雄工学部長、(名大)新美智秀工学部長、(京大)伊藤紳三郎工学部長、(阪大)河原源太基礎工学部長、(九大)高松洋工学部長、(阪大・連合会会長)掛下知行工学部長

陪席者 (東大)大久保達也副研究科長/運営委員、(名大)田川智彦副研究科長/運営委員、(阪大工学部)小田雅博事務部長、山本浩司総務課長、西田将之庶務係長、(東工大理工学研究科)川村二三夫事務長、(東大工学部)後藤秀逸事務部長、下大田真一総務課長、松本勝宏総務係長、矢崎恵一係員、(京大工学研究科)竹下基幸桂地区事務部長、八木清隆総務課長

事務局 石原直事務局長、枝丈雄事務局長補佐、安尾千恵子事務局員

注記 工学部長会議の回数は、一般社団法人として第1回、連合会として通算第7回である。

議題

1. 報告事項

- (1) 第6回八大学工学部長会議議事録確認
- (2) 第8回、第9回運営委員会報告
- (3) 分科会活動報告
 - (3-1) 達成度調査分科会
 - (3-2) 博士交流フォーラム分科会
 - (3-3) 博士人材に関する具体的施策と提言分科会 (メッセージ発信タスクフォース)
- (4) 日英工学教育シンポジウム報告

2. 協議事項

- (1) 「我が国の産業競争力強化に工学教育が一層貢献するために (提言)」について
- (2) 提言活動の進め方について

3. その他

- (1) 対外メッセージについて
- (2) 今後の予定について

配布資料

- 資料1 第6回八大学工学部長会議議事録 (案)
- 資料2 第8回ならびに第9回運営委員会議事要旨
- 資料3 平成26年度博士交流フォーラム分科会報告
- 資料4 平成26年度博士人材に関する具体的施策と提言分科会報告
(メッセージ発信タスクフォース報告)
- 資料5-1 UK Japan Eng Ed Symposium UCL Sept 14 2014
- 資料5-2 Copy of UK Japan Eng Ed Delegate List London Sept 14

- 資料5-3 Sample UK-JapanEng Univ League MOU Draft
資料5-4 UK-Japan Workshop 2015 1st Announcement
資料6 我が国の産業競争力強化に工学教育が一層貢献するために（提言）
ー博士人材の確保とリーダー人材の育成についてー
資料7 研究環境全体的に悪化（記事）
資料8 一般社団法人の設立にあたって（会長メッセージ）
資料9 八大学工学系連合会の会長校・幹事校について

議事要旨

はじめに、八大学工学系連合会会長(掛下阪大工学部長)の開会宣言の後、今年からの法人化に伴う会議構成の変更の説明、事務局長から会議日程の説明と配布資料確認、掛下会長から出席者の紹介、および新任の3学部長からの挨拶があった。

1. 報告事項

(1) 第6回八大学工学部長会議議事録確認（資料1）

資料1に基づいて昨年9月19日の第6回八大学工学部長会議議事録(案)の説明があり、了承された。

(2) 第8回、第9回運営委員会報告（資料2）

資料2に基づいて、昨年12月開催の第8回、今年1月開催の第9回運営委員会の議事要旨として、博士フォーラム、提言、連合会体制整備の議論の要約を参考にされたいとの報告があった。

(3) 達成度調査の進め方について

掛下会長より達成度調査は学生アンケート調査のシステムがそれなりに円滑に動くようになり、淡々と調査と集計の事業を進めているという状況なので、今回は報告なしとして、工学部長会議から運営委員会に、「達成度調査の今後のあり方について検討すること」という諮問を出す事にしたい旨の方針が示され、以下の議論が行われた。

- ・ 近頃の大学認証評価のために各大学で詳細な調査を実施しなければならず、この達成度調査が開始から10年を経てその意義が認め難くなっている。
- ・ アンケート調査結果の集計にコストをかけているにせよ、その結果が教育改善に使われていないし、改善効果も検証されていない。
- ・ 年ごとの変化は小さいことから、数年に一回の調査で良いかもしれない。
- ・ 東京大学を除いて回収率が20%程度と低く、統計データとしての意味が薄い。
- ・ 前年度調査の報告書作成により年度繰り越しの未払い金発生の原因となっている。
- ・ データの分析には大きな労力を要しており、コストがかかっている。
- ・ 時代に合わなくなっているとすれば変えていけば良い。
- ・ 他大学との比較、博士問題で父兄を説得するデータとして使えるものにならないか。
- ・ 八大学の事業として意味があるかどうか、東大をベンチマークに検討してはどうか。
- ・ 基本的に立ち戻って、八大学として本当に必要な達成度調査は何かを検討すべき。

- ・ グローバル化の時代、今後は海外との比較も大切になってくるという視点も重要。
- ・ 達成度調査の例のように各年とか3年に一度の事業を実施するというケースが出てくるとしたら、数年先までの年度予算を立てていくことが必要になるのではないかと。引当金方式もある。

以上の議論より、達成度調査のあり方、データの解析と利用の仕方、八大学での比較の意味、設問の改定などについて、運営委員会で検討してもらったこととした。

(4) 博士交流フォーラム分科会報告（資料3）

資料3を使って、昨年10月30・31日に北大で開催した博士学生交流フォーラムの実施報告（別紙1）、それを受けて運営委員会で行った「博士交流フォーラムの進め方に関する検討」の経緯と答申書（別紙2）、および、答申書を受けて工学部長会議メンバーのメール審議で出した今年度の対応方針の説明があった。その後、掛下会長より、「平成27年度は改善や工夫を加えながら博士交流フォーラムを実施し、並行して来年度以降の進め方について検討すること」を今期の工学部長会議が申し送りしたいとの指針が示され、これを受けて以下の様な議論が行われた。

- ・ 参加した学生は大きな意義を感じている。学生の自主運を教員がサポートする形で良いのでは。
- ・ 産業界の関与の仕方は改善の余地はありそう。UCEE ネットの様に同じところに依頼を続けると定型化してしまう懸念がある。色々と違った立場の方々が入ってくる方がむしろ良いのでは。
- ・ 外部からの企業の支援は受けなくても自分たちだけでやれるのではないかと。
- ・ GCOE、リーディング等と異なる特徴は？他との兼ね合いは？費用対効果？などを議論すべき。
- ・ リーディングは教員側がお膳立てする、八大学は学生NWが作るという住み分けになるのだろう。
- ・ 博士学生に（研究力だけでなく）企画力を付けさせる効果はあるのでは。
- ・ 幹事校の学生には効果があるが八年に一回、参加人数が限られるなど効果の範囲はとて狭い。
- ・ 博士を鍛えるとして上位引き上げか底上げかといえば、やはり全体の底上げが必要ではないかと。
- ・ 実施してみればそれなりの意義は出てくるだろうが、2日間もかけることは無いかもしれない。
- ・ 交流の目的が多様性の理解だとすると、工学だけでなくもっと広い交流を目指してはどうか。
- ・ 国内だけでなく国際的な参加メンバーにして、博士人材の在り方を議論してはどうか。
- ・ （提言にも書いた）今後の博士人材育成も視野に入れてフォーラムの在り方を検討してもらいたい。
- ・ 地域性にも根ざして各大学での多様な企画パターンを八大学で情報共有したいもの。
- ・ アイデアとして、産業界の人を招いて「博士教育の在り方」を議論する教員フォーラムを開催するのも新しい展開ではないかと。今回の提言で進めようとしている企業との対話の場に出来る。
- ・ 八大学が各大学の博士関連行事に協賛し、これらを八大学から情報発信するという方法もある。
- ・ 10月にリーディングフォーラムがあるが、そろそろ次はどうするかを議論しようとしている。博士フォーラムも今までやり方を思い切って捨てて、今までとは違うフォーラムとをやりたい。

以上の議論を受けて、幹事校の阪大基礎工には今までと違うやり方にトライしてもらい、分科会には来年度以降の進め方についても検討してもらおうという分担で進めてもらうこととした。

(5) 日英工学教育シンポジウム報告（資料5-1、5-2、5-3、5-4）

岸本東京工業大学工学部長より日英工学教育シンポジウムに関する報告があった。資料5-1、資料5-2を用いて、昨年9月10日～12日に英国で開催された第2回日英工学教育シンポジウムの報告があ

り、これを受けてのフォローアップのアクションが紹介された。

まず、資料5-3は、英国側が作成した今後の日英両グループの交流に関する協定書案であることが紹介された。内容には相互に情報交換しようとか、機会があったら集まろうとか、それぞれの政府に働きかけようとかいったことが書いてあるので、各校で内容についてチェック頂き、意見やコメントを世話校の東工大に連絡頂きたい(事務局にCC)との要請があった。

また、資料5-4に基づいて、この秋、9月20～23日に博士学生を集めてオックスフォード大学で開催するUK-Japan Symposium(テーマは材料の研究)の1st Announcementが紹介された。学生の参加や内容の問い合わせなどは窓口を担当する東工大に連絡することとした。なお、本件への八大学連合会のサポートは考えていないこと、この会議には先生方も集まるので最終日に今後の日英について議論したいこと、この企画には日英ともに大使館が興味を持ってきていることなどが報告された。

2. 協議事項

(1) 八大学からの提言について (資料4、資料6、資料7)

会長より、資料4を用いて、前年度の重要事業と位置づけた「八大学からのメッセージ発信・提言活動」について、運営委員会とメッセージ発信タスクフォースの一連の活動の報告があった。そして、今からの工学部長会議で議論頂き、午後の研究科長等会議の承認をもらって、5月13日の産業界(経団連)との意見交換、プレス発表に持って行きたいとの方針提示があった。

続いて、事前配布した提言案についてその後の変更も含めてタスクフォース主査の大久保運営委員から説明があり、次のような議論があった。

- ・ 「博士の数が足りない」という論理は、逆に「日本はこんな少ない博士数でも世界を席巻する技術大国になれた」と解釈されるのではないか。この点について会社は一体どう思っているのだろうかという疑問の提示があった。
- ・ この点に関し、「追いつき追い越せのキャッチアップの時代は修士卒で十分に機能したが、時代が大きく変わり新しく価値を創造して行く時代には高度博士人材が必須である。」「博士の育成が次世代への投資だとするとGDPの割には投資を怠って来たことの証である。投資を怠ってきたことを反省する企業も出てきている。」「業界・分野で温度差はあるものの今後会社として何をやるべきか分からないという危機感を持つ企業・業界も多い。」「今のペースで少子化が進む日本社会をサステイナブルにするためにはイノベーションは必須であり、それを担うのは高度博士人材ではないか。」などの議論があった。
- ・ なぜ日本から破壊的イノベーションが起こらないかの原因として産学連携の「産のニーズに学が応える」という捉え方に問題があった。ここは、「国民、社会のニーズに産官学が連携して応えていく。」という視点が重要である。⇒ この意見を受けて提言に修正を加えることとした。
- ・ 日本社会は産のニーズ・学のシーズという構図で「ものづくり」を修士で回して来たが、これからはこれでは不十分で、社会の真のニーズに産官学が応えていくという構図のなかで、国民社会に(国家の屋台骨を作っていきましょうという)コトづくりを発信する博士人材が必要となる。
- ・ この論点に関連して、「日本のこの100年の産業競争力の評価」、「官の役割の変遷」、「価値創造に貢献できる博士人材の育成」などについて議論があった。
- ・ 提言は差し障りなくまとめられているが、現実には(大学ばかり悪者にされるのではなく)産に対しても

官に対しても言いたいことは沢山抱えている。ちゃんと物申して行くのが良いとの経産省の指摘もあったが、とにかく各方面で「理工系人材」に夢を与えるような施策をやってもらいたい。

- ・ やはり先に「大学が変わる。一段階ギアを上げて頑張る」と言って、産・官の応援を頼む形だろう。
- ・ 教育現場では、学部・大学院のレベル・学生の意識が変わって行っていること、やはりレベルの高い学生が博士に進学していることなどの時代の移り変わりを産業界に分かってもらいたい。

以上の議論を踏まえつつ提言を承認頂き、5月13日の経団連とプレス発表に臨むので、何かあったら事務局に連絡頂く、「国民社会のニーズ……」の部分は早速に追加修正を行うこととした。

(2) 提言活動の進め方について

- ・ 今年度は、前年度の「博士人材施策と提言分科会」と「メッセージ発信タスクフォース」を統合して「提言(メッセージ発信)分科会」を設置する。今年度の提言テーマについて意見交換を行った。
- ・ 昨年のテーマ提案にあった「若手教員への任期制導入による若手の短期的成果追求の傾向」、「種々のデータに基づく基礎研究力弱体化の現実」、および、資料7の科学新聞記事などをもとに、今年度扱う提言テーマとして「基礎研究力の強化」が提案された。
- ・ 意見交換の後、本日の議論を付けて今年度の提言を検討するよう分科会に諮問することとした。

3. その他

- (1) 会長より、資料8の「一般社団法人八大学工学系連合会の設立にあたって」は、連合会ホームページの会長挨拶文の案なので、意見があったら事務局に連絡するよう依頼があった。なお、こおで、八大学工学部長会議の(60年以上前と言われる)オリジンが分かったら事務局に知らせてもらうこととした。関連して、一般社団法人化を記者発表してはとの提案があり、当の対応としては5月13日の提言のプレス発表時に合わせて扱うこととした。
- (2) 法人化した連合会のビジビリティを上げることを狙って社団法人のロゴを作ることとし、資料8で3つのロゴ案が提示された。これらの3つの案について、色の使い方等に関する議論があった後、新提案を含めて工学部長会議メンバーからの意見を事務局で集約し、それをもとにロゴを選定することとした。
- (3) 資料9を用いて今後の会長校・幹事校の紹介があり、それぞれの幹事校から会議予定が紹介された。
- (4) 東北大学滝澤工学部長より、今秋は、9月18日(金)、仙台駅直結のホテルメロポリタン仙台で開催予定とのアナウンスがあった。
- (5) 光石工学部長より、来年春は4月22日(金)に、ここKKR東京で開催予定とのアナウンスがあった。
- (6) 次に、掛下会長より、今年、来年の会長校は京都大学で、本日午後の社員総会において伊藤工学部長が会長に選任される予定であることが報告された。
- (7) これを受けて、掛下会長より退任の挨拶があり、メンバーより拍手で感謝の意が表された。
- (8) 続いて、京大・伊藤先生より会長就任の挨拶があった。

以上をもって第7回工学部長会議を終了することを掛下会長が宣言した。また、事務局長より、午後1時30分より定時社員総会、14時より八大学工学関連研究科長等会議が開催される旨の案内があった。

以上